

---

WHITE狂想曲

~ like you... ~

青野綾華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

WHITE狂想曲

｝like you…｝

### 【Nコード】

N7948S

### 【作者名】

青野綾華

### 【あらすじ】

カプリチオ  
WHITE狂想曲｝like you…

（あなたのように…）

小五郎が受けた依頼で、北海道まで行くことになったコナン達。依頼は人捜しとのこと。

ちょうどその頃北海道では、沢山のイベントがやっていて、人捜しの休憩がてら参加することになる。だが、そこで悲劇が…

歩美「だって…だって私、なりたかったんだもん！」

蘭「もう、遅いから…だから早く貴方は…」

哀「もしかしたら私もなりたかったのかもしれない…」

私の2番目の作品です。

連載中の小説がクライマックスを迎えようとしているため、休憩として書きました（笑）でも、両作品両立させて書いていきたいと思っています！ まだ駄文だらけですが、お付き合い願います。 m（

） m

ちなみに今回の話は歩美と哀（と蘭）がメインです。強いて言うなら哀です。

哀と明美の小さい頃の話なども入れる予定です！勿論コナンも活躍します。

最後にご拝見の方よろしくお願ひします m（ ） m

## **P r o l o g u e (前書き)**

まずは北海道に行くことになったきっかけについてです。

P S

後書きも是非読んで下さい！

## Prologue

“ 2月4日金曜日、昼 ”

今日は帝丹小学校、帝丹高校どちらも休みだ。帝丹高校の入試で5連休になったのだ。

く 阿笠邸 く

歩美「はぁ…今年の冬は何もないね…」

元太「俺どこにもいってねーんだぜ…」

光彦「僕もです…」

歩・元・光「ハア………」

ため息をつく少年探偵団。その顔は博士に「どこかに連れて行って」と訴えているようだった。

博士「仕方ない。どこかに連れて行ってやろうかの」

歩美「えゝ本当!？」

コナン「

そう言えばおっちゃん、明日北海道に行くって言ってたな。何か人捜しの依頼がきたらしくて…」

光彦「いいですねゝ。あ！僕達も一緒について行きませんか？」

元・歩「賛成!」

コナン「おいおい……」

哀「クスッ」

コナンの後ろで話を聞いていた哀は小さく笑った。

コナン「あんだよ……」

哀「さすが工藤君ね…毛利探偵の名を北海道まで轟かすなんて……」

哀は小さな声で言った。

コナン「ああ…結構男前だろ？」

哀「悪魔ね…ある意味…」

コナン「何だよそれ…」

コナンはじと目で哀を睨む。

元太「熊がどうかしたのか？」

突然元太がコナンと哀の会話に首を突っ込んできた。

コナン「え？あ、いや…熊見れたらいいなーって…アハハ」

哀「北海道だったら私も行くわ…」

コナン「ん？何か北海道に

あんのか？」

コナンは小さな声で

尋ねる。

哀「熊が見た

いのよ…ねえ？悪魔さん？なーんてね…クスッ」

コナン「あっそう。」

コナンは呆れて哀から視線をずらした。

光彦「でも、どうやって毛利探偵頼めば…」

コナン「しゃーねーな。俺がおっちゃんに頼んでやるよ！」

歩美「ありがとう！」

（ほんと、コナンだーい好き！）

博士「じゃあみんなちゃんと用意しとくんじゃよ」

歩・光・元「はーい！」

哀「フッ…」

こうしてみんなで北海道に行くことになった。



## Prologue (後書き)

つまんなかったと思いますがご拝見ありがとうございます！これからも頑張ります！

ところで、何故北海道にしたかと言うと、「沈黙の15分」の影響です。

すっかり雪にはまってしまつて… (笑)

「沈黙の15分」にはまつてるなら新潟県にしろよ！つと自分でも突っ込みたくなるのですが、アニメでキャラクターデザインをやつていて、映画ではキャラデザ&総作画監督をやつて下さつている須藤昌朋さん（知らないですね…）の生まれ故郷が北海道だから北海道にしました！

須藤昌朋さん大好きです！（ちょっと気持ち悪いですね…ごめんなさい！）

ちなみに題名の「WHITE狂想曲」は沈黙の15分のBGM「ホワイトクライシス」と沈黙の15分のマジックファイル「新潟〜東京 おみやげ狂想曲」から取りました。like youは…あなたのようについで…そういう話だからです（笑）

ごめんなさい…長々と失礼しましたm( \_ \_ )m



L e t · s   g o   t o   H O K K A I D O (前書き)

L e t · s   g o   t o   H O K K A I D O

(いざ、北海道へ)

まだ北海道ではつきません。

## Let's go to HOKKAIDO

“ 2月5日土曜日、朝”

〽空港〽

朝の太陽が街を明るく照らす。

その頃、小五郎と蘭と園子は空港で少年探偵団達を待っていた。

蘭「うゝん。気持ちいいゝ！」

園子「ホント！朝の空気は最高ね！」

小五郎「ったく…なんで鈴木財閥のじゃじゃ馬娘がついてくるんだよ…」

園子「いいーじゃない！私だって北海道行きたいもの！蘭が誘ってくれたし！」

蘭「まあまあ、せっかく北海道までいくんだから、旅情気分でも！お父さん。」

小五郎「バカやろう！俺は依頼のためにいくんだぞ！旅情気分なんて関係ねーよ！」

コナン「ハハ…」

歩美「蘭お姉さゝん！」

遠くの方から歩美の声が聞こえた。どうやら空港についたみたいだ。

少年探偵団はニコニコしながらこちらへ走ってくる。

光彦「ハアハア…ごめんなさい。遅くなってしまって…」  
蘭「いいのよ。」

小五郎「いいか！オメーら。大人しくするんだぞ！」  
歩・元・光「はい！」

哀「こんだけの人数になると本当に旅行みたいね…」

哀は小さな声でコナンに話しかけた。が、コナンはツンとして何も答えない。

哀「昨日のことまだ引きずってるの？根に

持つタイプね。」

コナン「バーロー、なんじゃねーよ…」

博士「もう時間じゃないのかの？」蘭「そうね。もうそろそろ飛行機に乗ろっか。」  
そしてコナン達は飛行機に乗った。

～飛行機～

博士とコナン、その後ろに歩美と哀、その後ろに元太と光彦が座り、反対側に小五郎、蘭、園子が座った。

スチュワート「まもなく出発します。」

歩美「ワクワクするね！」

元太「ああ！」

北海道に胸を膨らます少年探偵団。最初はワイワイと騒いでいたが、時間が経つにつれ、静かになっていった。

光彦「まだ着かないんですかね。」

歩美「暇だよね」

博士「フッフッフ…」

コナン「嫌な予感がする…」

博士「お待ちかねのクイズの時間じゃ！」

一同「……」

周りは一層静かに

なった。

元太「またダジャレクイズかよ…」

博士「北海道の釧路から10億円が盗まれたんじゃ。でも犯人は怖くなって取ったものをどこかに捨ててしまった。さあ、そこはどこかの？」

歩・光・元「うーん…」

コナン「…あ…分かったぜ！」

園子「私も！」

蘭「私も！…でも、ちょっと変わった問題ね…」

歩美「うーん…うーん……あ！分かったー！『10億円が盗まれた』って、『お金が取られた』ってことでしょ？釧路から金を取るのよ！だから答えは川路ー！」

博士「せ、正確じゃ…」

元太「すげーぜ！歩美」

蘭「ホント！」

歩美「えへへ…」

コナン「やるじゃねーか！」歩美（コ、コナン君…）

歩美「そ、そんな…」

歩美は顔を赤くして照れる。

歩美（コナン君みたいに冷静に考えてみたら解けたんだ…）

哀「……………」

みんなが博士のクイズに夢中になっている中、哀は一人物思いにふけていた。

歩美「どうしたの？」

心配して歩美は尋ねる。

哀「え？あ…いや……何にもないわ……」

コナン「……………」

そしてまもなく北海道に着いた。



# DAIYAMONDdust（前書き）

ダイヤモンドダスト  
DAIYAMONDdust

＊読み方注意

『弟子屈』は『てしかが』と読みます。

## DAIYAMOND dust

歩美「わっ！北海道に着いた！」

コナン達は飛行機から降りた。

哀「うわ！」

哀「らしくないが、哀は石につまづいてしまった。」

コナン「おっと…大丈夫か？灰原」

コナンはギリギリのところで哀を支えた。  
おかげでけが一つしなかった。

哀（く、工藤君…） 哀「…あ、ありがとう。」

~~~~~

北海道についたコナン達。依頼者が  
いるのは弟子屈町の青藤ホテル。コナン達は電車やバスを使い、景色を見ながら弟子屈町の青藤ホテルに向かった。

~~~~~

“午後1時”

↓弟子屈町青藤ホテル前の雪原↓

一同「うわっ！綺麗！」



それはまるで宝石の様。太陽の光が細氷に反射してキラキラ光る…  
そう……それは…

雪原を舞う

### ダイヤモンドダスト

ら降る宝石ですね！

歩美「なんか掴めそう！」

光彦「まさに空か

蘭「懐かしいな〜」

蘭が静かに言った。

コ・園「へ？何が？」

蘭「ううん、何でも無いの」

蘭は降り続ける宝石をとろけるような瞳で見つめる。

哀「……………」

けど、哀はそれを

悲しい瞳で見つめていた。

私、見た……この景色……まだ私

が少し小さかった頃……お姉ちゃんと一緒に……

お父

さんの薬の研究のために家族全員で北海道に行った時……

あの頃は二人とも普通の子供だった……組織

なんか気にもとめていなかった…

た…

雪原の上に明美の姿が映った。哀には見え

優しくて明るくて、勇敢で、  
の姿が…

そして憧れの明美

哀「……」

ムの一部だった…

哀にとって、今瞳に映っているのはアルバ

まだ組織なんて気にもとめてなかった頃の大事なアルバムの…

だがそれが逆に哀を苦しめた。

明美「志保！」

雪原の上で舞い踊る明美が、哀の瞳の中で振り向いた。でも次の瞬間…

パアアアン！…

頭の中で一発の銃

声があったと同時に、明美は緋色の渦に巻き込まれて…消えていつてしまった…

哀（お姉ちゃん…）

哀の瞳は小さく揺れる。

哀はアルバムを閉じるため、気持ちを落ち着けて瞳を閉じた。  
そして再び瞳を開いた。

哀（ふう……閉じられた……）

哀はため息を着いた。

博士「どうかしたのか？哀くん。」

哀「いえ……何にもないわ……」

哀は何もなかったように答えた。

元太「なあ、早く

ホテル行こうぜ！」

蘭「そうね。もうそろそろホテルに行こっか。」

一同「はい！」

そしてコナン達は青藤ホテルに向かった。

哀「……」

哀は一足遅れて青藤ホテルに向かった。

## DAIYAMOND dust（後書き）

最初の方はいらないでしよって思った方もいらっしゃるでしょうが、  
— 応最後の最後に繋がります。

ちなみに、弟子屈町は実際にありますが、青藤ホテルは実際にありません。信じないで下さい（笑）

l o n g i n g (前書き)

l o n g i n g (憧れ)

\* 読み方注意

『須山氷恵美』は『すやま ひえみ』と読みます。

『浩樹』は『ひろき』と読みます。

どちらも人の名前です。

## longing

＼青藤ホテル＼

フロント係り「部屋は205と206号室になります。」

蘭「ありがとうございます。」

小五郎「あの…ここに『須山水恵美』って方いますか？その方に呼ばれて来たんですけど」

フロント係り「さあ、そのような方はいらしてませんけど…」

小五郎「え？おつかしーな。まだ来てないのか」　コナン「

……」

コナン達はそれぞれ自分の部屋に向かった。　　と言っても部屋は隣同士なのだが…

『205号室』がコナンと元太と光彦と小五郎と博士。

『206号室』が蘭と園子と歩美と哀。

＼206室＼

園子「うわー！和式ね！窓からは雪原が見えるし、最高ね」

蘭「ホント、落ち着つくね。」

部屋は和式で広く、窓からは森林の新鮮で冷たい風が吹き込んでくる。

また、窓からは白くて広大な雪原が見える。

（205室）

小五郎「まったく、依頼した本人がまだ来てないとは…呆れたもんだぜ。」

小五郎は部屋に入るなり、愚痴をこぼした。

コナン「ねえ、電話で依頼を受けたの？」

小五郎「いや、手紙だぞ。ほら、これだ。」

小五郎はコナンに手紙を出した。

『拝啓

毛利小五郎様

ました。皆さんはお元気で過ごしてしょうか。　　冷たい風が吹き付ける季節となり

て、今回私があなたに手紙を差し出したのは他でもありません。依頼　　1年前、雪崩

したいことがあるからです。　　事故以来、姿を消してしまった弟の「浩樹」の行方を探してもらいたいです。現在7歳の男の子で、左目の下にほくろのある子な　　では、北海道弟子屈町の青藤ホテルでお

待ちしています。

敬具

須山氷恵美』

コ

ナン（手書きじゃなくてワープロで打ったのか…なんて、そんなこと考えたって無駄だな）

コナンは手紙を放り投げた。

コナン「依頼者はまだ来てないみたいだけど、その浩樹って子、探そう。」

小五郎「あ、ああ……」

こうしてコナン達はみんなで浩樹君を探すことになった。

くある雪原く

少年探偵団と哀と

コナンと博士は山を搜索した。

“午後4時頃”

博士「あれから3時間探したが、なかなか見つからんのー。その浩樹君という子。」

コナン「やっぱりそう簡単に見つけられねーよな。」

元太「もう俺ヘトヘトだぜ……あゝ早くホテル戻ってうな重食いたいぜ！」

みんなはヘトヘトで、歩くスピードが遥かに遅くなっていた。まるでお化けのようだった。

コナン（大分ホテルから離れた気がする）

コナンは手にしている地図を見ながら思った。



歩美「もう帰ろう……」  
博士「そうじゃのう。」

疲れ果ててフラフラしている歩美はもときた道に振り返った。でもその瞬間…

歩美「きゃあああ！」

歩美が4メートルほどの急な崖に落ちそうになった。  
でもコナンが落ちそうになった歩美の腕を掴み……代わりに自分が犠牲になった。

コナン「うわぁ！」

コナンは4メートルの崖を止まることなく  
滑り落ちていく。

歩美「コ、コナンくん……！！！！」

歩美は叫んでコナンに手を伸ばした。

間に合わなかった。コナンはそのまま崖をずり落ちていった。

結果、コナンは足を捻挫してしまった。

一同「コナン（く〜ん）！」

コナン「痛っ！」

光彦「大丈夫ですか！？」

みんなは崖の上から心配そうに顔を覗かせる。

コナン「オイオイ、そんなに叫ぶなよ……まったく大袈裟なんだよ……っ！」

コナンはそういつとまだ痛む足で、木の根っ子や石を伝って上まで登った。

そのコナンに歩美は近寄り、何度も謝った。

歩美「ごめんねコナン君……！本当にごめんね……！」

歩美は少し涙目、涙声になって必死に謝った。

コナン「このくらい大丈夫さ！よく捻挫はするし。歩美ちゃんは何も悪くないから泣くな。それに歩美ちゃんが無事で良かったぜ。……っ！」

コナンは足の痛みを隠しながら、責任を感じている歩美を笑顔で励ます。

歩美「コナン君……」

歩美はコナンの優しさを全身で感じた。

やっぱりコナン君は私の……憧れ……

哀「……」

一方哀は何かを思い出したかのような顔で、その光景を見つめていた。

コナン「どうした、灰原」

哀「いえ……何にもないわ……」

哀は少し驚いたが、表情を元にもどして首を振った。

博士「とり

あえずホテルに戻ろう。」

そして博士（達）は、コナンをおぶってホテルに戻った。

## Longing(後書き)

いきなりの展開ですが、許してくださいm( \_ \_ )m

この出来事によっていた歩美ちゃんが変わっていきます。

i n H O T E R U (前書き)

題名ベタでごめんなさい m ( — — ) m

ちよっとなつまんないです。

## i n H O T E R U

〈青藤ホテル〉

〈205号室〉

コナン「あれ？おじさん。もう帰ってたんだ！」

部屋の中には小五郎がタバコを吸って座っていた。

小五郎「なんか収穫でもあったか？」

博士「いや…そっちはどうじゃったんじゃ？」

小五郎「全然…ん？コナン、足どうしたんだ？」

歩きにくそうにするコナンに尋ねる。

コナン「ちよつと転んで捻挫しちゃって…えへへ…」

小五郎「ったく、気を付けろよ！」

その時、ドアをノックする音がした。

入ってきたのは、蘭、園子、歩美、哀だった。

蘭「哀ちゃんから聞いたわ。石につまづいて捻挫したんですってね。」

コナン君、足大丈夫？」　コナン「うん。平気だよ。」

歩美「……」

哀は石につまづいて転んだと蘭達に言っていたが、本当は自分（歩美）の代わりに捻挫した。まだ責任を感じているのか、少し気まず

そつにする歩美。でもそんな歩美にコナンは優しく微笑む。

光彦「あ、そうだ！みんな露天風呂に入りませんか？疲れてるだろうし。」

元太「入ろうぜ！入ろうぜ！」

園子「そうね。眼鏡のガキンチョも露天風呂入れば足の痛みが癒やされるかもしれないし。」

園子はコナンを見ながらニヤニヤして言う。

蘭「じゃあみんなで入りましょ。」

こうして露天風呂に入ることになった。みんなはそれぞれ入る準備をした。そして……

く女子露天風呂く

歩美「気持ちいいね」哀「ええ。」

歩美「ねえ、哀ちゃん……」

哀「何？」

歩美は恥ずかしそうに言う。

歩美「哀ちゃんは…憧れの人って…いる？」

哀「……………いいえ、いないわ」



哀は少しためらうたが、いないと答えた。  
口ではそう言ってるけど…それは嘘だ……

だって私の憧れは……お姉ちゃんなんだもの…

哀「吉田さんは？」

歩美「私の憧れの人はね、コナン君。」

蘭「へえ、歩美ちゃんの憧れの人ってコナン君なんだ。」

園子「眼鏡のガキンチョも案外尊敬されるのね。」

歩美「コナン君、頭いいし、勇気あるし、優しいし。」

哀「……そうね。」

歩美「蘭お姉さんの憧れの人？」

突然歩美が尋ねる。

突然聞かれたので蘭は慌てた。

顔赤いわよ…

哀は心の中でつつこんだ。

は……」 園子「新一」

蘭「わ、私

園子は蘭になりきって答えた。

蘭「ち、違うわよ！」

園子「じゃあ誰？」

蘭「そ、それは……」

園子は嫌み口調で蘭に問い詰める。

その質問に蘭は答えることができず……さらに顔が赤くなる。

園子「新一君でしょ？」

蘭「そうじゃないけど、そうかもしれない……」 園子「やっぱり新

一君なんでしょ？ 全く、蘭は素直じゃないねえ。」

そんなこと、彼女の顔見ればわかるじゃない。顔に新一って書いてあるし。

哀はまた心の中でつつこんだ。

蘭「新一は優しいし……誰かを守ろうとしたら自分がどうなっても必ず守ってくれる。それに……例えば殺人犯でも絶対に傷つけない……」

下を向きながらそう語る蘭の顔はまるで恋人を見つめているかのようだった。

誰だって憧れの人はいるのね。冷酷で無慈悲なこの私でさえいるんだもの……人は目標や目的がないと、大人にはなれない……もし憧れの人を失っても、その人が憧れの人である限り変わりはない……私のようにね……

哀（なーんて……くさいこと考えるのは止めにしよう）

哀は露天風呂の湯をすくってはゆっくりと垂らしそれをじーっと見つめた。

く男子露天風呂く

光彦「コナン君、足少しはましになりましたか？」

コナン「ああ……」

元太「なあ、今日の午後8時半からこのホテルの近くの川湯温泉街で『ダイヤモンドダスト in KAWAYU』っていうイベントあんの知ってつか」博士「川湯温泉街でやるあれか。確か湯の川園地の森でイルミネーションで飾られた散策路をスノーシューで歩きながらダイヤモンドダストを探すイベントじゃったな。」

光彦「へえ」。楽しそうですね。あ、このホテルの近くならそのイベントに参加しませんか？」

元太「そうそう。俺もそう言いたかったの。」

小五郎「そんなイベントに参加する暇なんてねーよ！だいいち俺達は浩樹君を探すために……」

博士「まあまあ、もう夜じゃし、人探しはできんよ。それにせつかく北海道に来たんじゃ。少しは楽しんだらどうじゃ？」

小五郎は何も言えなくなった。

元太「ってことで……決まり〜！」

コナン「ハハハ……」

そして午後7時前だというのに、夕食を済ましたコナン達はみんな  
で川湯温泉街に向かった。

## i n H O T E R U (後書き)

『ダイヤモンドダスト i n K A W A Y U 』は本当にあるイベントです。一応内容も同じです。ちなみに川湯温泉街は本当にあります。

ダイヤモンドダストは夜でも気温が低ければ見れるそうです。キラキラ光らないと思いますが…

詳しくは携帯やパソコンで『ダイヤモンドダスト i n K A W A Y U 』で検索して調べて下さい。

memorys IBENTO (前書き)

memorys IBENTO (思い出しのイベント)

短いです。

## memorys I BENTO

く川湯温泉街 湯の川園地く

歩美「うわゝ、綺麗！」

一同「ホント」……」

イルミネーションの優しい明りと温泉川から立ちのぼる湯煙のコントラストは、凍てつく冬の夜空を情緒豊かに照らしていた。

小五郎「おゝ！！これは絶景だな！！」

博士「見事じゃ！」

園子「イルミネーションと温泉川の湯煙が  
絶妙にmatchして何とも言えないわね」……」

みんなは眼前の景色に心を揺らされた……

瞳の前にあるのは、まるで幻想の世界……

イルミネーションの光……温泉川の湯煙……

夜の冬景色……

その上を舞い踊る子供達…  
それは冬ならではの景色……

冬の全てが、心を揺らす……

元太「すげー！すげーすげー！！すっげー！！！」

光彦「げ、元太君…さっきから『すげー！！』しか言ってますよ。」

元太「いーしゃねーか！本当にすげーんだからよ！！」

コナン「まさにすげーとしか言いようがねーな！」

コナンは前に広がる景色に瞳を輝かせながら元太達の方へ歩いていった。

元太は光彦をジト目で睨んでにやけた。

光彦「……アハハハ…ホントすげーとしか言いようがないですね…」

みんなは小さく苦笑した。

哀（確かお姉ちゃん達と一緒に北海道に来た時…二人でこのイベントに参加したんだっけ…）

蘭「……………」



蘭はまるでアルバムを見ているような目で景色を見まわした。

園子「ああー！こんな素晴らしい景色を、愛しの愛しの新一に見せたかったな〜！…な〜んてね」

そんな蘭を園子はからかう。我に帰った蘭は顔を赤らめて言った。

蘭「な！？ち、違うわよー！…ただ……」  
園子「…ただ？」

『ただ…』その言葉に疑問を抱く。  
みんなは蘭に注目した。

蘭「懐かしいな〜って……」

一同「え？」

懐かしい？

蘭「私がまだ小さかった時ね、新一の両親が仕事の都合で北海道に

行くことになったの。新一はいくつていったから、私も連れていってもらったの。」

コナン（そーいやそんなこともあったっけ…ハハ…すっかり忘れてたぜ……）

蘭「北海道に着いてからは、いろんな観光地をめぐって…その時、ダイヤモンドダストを見たの。」

園子「なるほど、今日の昼、蘭がダイヤモンドダストを見て『懐かしいな』って言ったのはそんなことがあったからなんだ。」

蘭「うん。それで夜みんなでこのイベントに参加したんだ。」

蘭が一通り話し終わると、園子はまた蘭をからかう。

園子「なんかロマンチックね。あんたらがそんな昔から愛しあっていたなんて、私知らなかったわ〜」

コナン（な!?!）

蘭とコナンは赤くなった。

蘭「そんなんじゃないわよ!」

歩美「でも昔からの恋って素敵よね〜!」

コナン「歩美ちゃん！」

光彦「あれ？コナン君、顔赤いですよ。」

光彦は不思議そうに尋ねた。

小五郎「なーんでお前が赤くなるんだ？」

コナン「あ、いや……………」

哀「ホント江戸川君、顔真っ赤つか。」

哀は小さく笑いながら小さな声で言った。

コナン「は、灰原！」

哀「顔が真っ赤で熊さんみたいね。可愛いわよ。クスッ」

哀は冗談半分で言う。

そして博士も嫌みっぽく笑った。

しばらくの間こんなことが続いた。

~~~~~  
そうしている内にイベント開始まで10分  
を切った。

m e m o r y s I B E N T O (後書き)

話しが全然進展しなくてごめんなさいm(――)m

蘭の過去、哀の過去は後ほど詳しく教えます。

**p a s t t r a g e d y (前書き)**

p a s t t r a g e d y (過去の悲劇)

題名が本当にこれであっているか分かりませんが許して下さい。

\* 読み方注意

『穴戸明子』は『ししどあきこ』

『増永久美』は『ますながくみ』

『菅野義治』は『すがのよしはる』

『大沼忠史』は『おおぬまただし』

と読みます。全部人の名前です。

## p a s t t r a g e d y

“ あれから10分後の午後8時30分 ”

ダイヤモンドダスト in KAWAYU は開催された。

会場は参加する子供の声で賑わう。

最初に挨拶と説明があった。

このイベントは、川湯温泉街の湯の川園地の森で行われ、イルミネーションで飾られた散策路を、スノーシューで歩きながらダイヤモンドダストを探すイベント。参加できる子供の数は少ないが、コナン達はギリギリ参加できた。

そして…ゲーム始め。

元太「よし。行こうぜ！」

光彦「はい！」

歩美「コナンと哀ちゃんも」

コナン「あ…おう。」

「

歩美はコナンと哀の手を引っ張り、元太と

光彦と一緒に走って行った。

そんな少年探偵団を、蘭達は暖かく見ていた。

明子「可愛いお子さんね」  
ふと後ろで声がした。

蘭「え?…」

後ろにいたのは4人の大人だった。

明子「あ、いきなりごめんなさい。知り合いの子を思い出して…私、  
宍戸明子といいます。」

久美「私は増永久美です。」

菅野「俺、菅野義治!」

大沼「俺は大沼忠史」

明子「久美は去年私達の大学へ転入した同級生で、あとの3人は幼  
なじみで、大学3年生なの。みんな北海道に住んで、よくこのイ  
ベントに参加したのよ。」

蘭「へえ…あ、私毛利蘭です。こちらが親友の鈴木園子で、そ  
の後ろが阿笠博士で、私の横が父の毛利小五郎です。」

久美「毛利小五郎ってあの有名な…」

大沼「小五郎さんがいるってことは、北海道ニッポで何かあったんですか  
?」

小五郎「あ、いえ…ちょっと人捜しの依頼を…」

明子「人捜し…か…じゃあ私達も…」



元太「えゝ！？」

遠くで元太が叫んだ。

小五郎「どうしたんだ？」

元太の声を聞いて驚いた蘭達は、少年探偵団のいる場所へ走って言った。

蘭「どうかしたの？」

向こうから蘭達が走って来た。

そこには、見知らない一人の少年がびくつきながらベンチの上に座っていた。

その光景にあの大学4人組は驚いた。

明子「浩樹君！！こんなところにいたのね！！」

一同「え！！」

小五郎「じゃあまさか、この子が浩樹君!？」  
コナン「うん。」

“ 2分前 ”

元太「はあ…なかなか見つかんねえな!ダイヤモンドダスト!」  
光彦「はい……」 歩美「ん?どうしたんだろう、あの子。寂しそうな顔してるよ。」

歩美はベンチの上に座っている一人の男の子を差した。

コナン(左目の下にほくろ?まさか…)

歩美「ちよつと話しかけてみようよ!」

光彦「そうですね。」

歩美達は恐る恐る男子に近づいた。

歩美は男の子の肩を叩き、挨拶をした…そのとき…

歩美「どうしたの?気分悪いの?お母さんやおと…」

ビクッ

「ば、僕に触らないで!」

その男の子は歩美の手を追い払い、大声で叫んだ。

哀「…どうかしたのかしら。」

コナン「君、もしかして浩樹君？」

「え？………」

元太「えゝ！？」

光彦「浩樹君って、あの依頼文に書いてあ

った浩樹君ですか？」

歩美「うそゝ！！」

「……………」

コナン「ねえ、お姉さん達はこの子のこと知ってるの？」

コナンは明子達に尋ねた。

明子「ええ……」

小五郎「ちょっと話を聞かせてもらえませんか？」

明子達「はい……」

小五郎「では青藤ホテルで……よろしいでしょうか」

菅野「いいですよ。俺達もちょうどそのホテルを借りてるし……」

小五郎「じゃあ行きましょう。」

イベント中だったが、コナン達は一度ホテルに戻って、あの4人から詳しく話してもらうことになった。勿論、浩樹も一緒に……

〳青藤ホテル　ロビー〳

青藤ホテルへ向かったコナン達はロビーの椅子に座って話を聞いた。

小五郎「では早速話を聞かせて下さい。」4人は互いに顔を見合ったが、明子が口を開いた。

明子「浩樹君は私達の親友の弟だったんです。でも一年前、浩樹君はお姉さんと雪崩にいました。結果、お姉さんは見つからず、浩樹君は見つかったんですが……浩樹君は運ばれた病院から姿を消していたんです。お姉さんは今年、危難失踪を認められ、正式に死亡した事になったんです。」

園子「危難失踪？」

園子は明子に聞いたが……

コナン「普通失踪と危難失踪があつて、普通失踪は7年で死亡が認められるんだけど、今回の話みたいに災害や遭難のように明らかに死亡したと思われる危難失踪は、一年で死亡が認められるんだ。」

蘭達「へえ……」

園子「……て！！あんたに聞いてないわよ！！」  
明子「あつてもその坊やの言うとおりですよ。凄いわね。」

小五郎「おほん！！まあそれはおいといて、本題に戻りましょう。」

明子「はい……浩樹君がいなくなった夜から私達は浩樹君を必死にさがしました。でも見つからないまま、現在に至ったんです。まさか浩樹君が見つかるとは思っていませんでした。私からはこのくらいで……」

菅野「俺からも特にないが…」

大沼「俺も…」 久美「私はこの4人とは去年知り合ったばかりなので浩樹君や浩樹君のお姉さんのことは…」

小五郎「さっきから気になってたんなんですが、浩樹君のお姉さんの名前は…」

明子「名前は『須山氷恵美』」

小五郎「どつかで聞いた名前だな…確か手紙の……」  
コナン達「……………」

小五郎「っておいおい！！そんな馬鹿な！？だってこの人は……」

past tragedy (後書き)

オリキャラ多くて、しかも名前が変でごめんなさい  
m (—) m

**s u d d e n l y (前書き)**

s u d d e n l y (突然)

久しぶりの更新です。

遅くなってごめんなさい m ( ( m

今日は短めかな？

会話だらけです (いつもだけど)

s u d d e n l y

明子「名前は『須山氷恵美』」

小五郎「どつかで聞いた名前だな…確か手紙の…！」  
コナン達「！！！！！」

小五郎「っておいおい！！そんな馬鹿な！？だってこの人は…俺に依頼してきた人だぞ！？」

小五郎は素っ頓狂な声を張り上げて驚いた。大学生達も驚いきの表情を表していた。

哀「今頃気付くなんて……全くね…」

コナン（俺も今まで気付かなかった…）

みんなが驚いているときだった…大沼の様子が可笑しくなった…

大沼「ひ、氷恵美…やっぱり生きてたんだ…」

大沼はまるで誰かに取り付かれたように小五郎の方へ歩みよる。

大沼「氷恵美！」

小五郎「っちょ！」



突然大沼が小五郎に襲い掛かろうとした。

久美「大沼君！失礼よ！」

久美の声で大沼は我に帰った。しばらくの間沈黙が続いた。

小五郎「あの……大沼さんどうかされたんですか」

明子「え？あ、ああ……実は大沼君と氷恵美、付き合っていたのよ……」

小五郎「そうだったんですか……」

菅野「……大沼……」

大沼は俯いて手を握りしめた。

明子「それで毛利さん。氷恵美は生きてるんでしょうか？」

小五郎「ええ、多分。手紙には『青藤ホテルで待ってます』て書いてありましたので、ここにこられるかと……」

コナン「でもさあ、本当に生きてるのかな？氷恵美さん」

コナンは小五郎の意見に反するように言った。

コナン「だってさ、依頼した本人が先に目的地にいないのって変じゃない？」

小五郎「……」

コナンはそれに続け……

コナン「それに、この手紙。ワープロで書いてるでしょ？これじゃまるで自分の正体を隠してる…」

コナンの言葉を遮るように小五郎は言った。

小五郎「ぶあくか！ワープロで手紙を書く人くらいいるじゃねーか！それに依頼者にだって都合があるってーの！だから何も可笑しくねーんだよ！」

コナン「……だから僕が言いたいののは」

蘭「コナン君、お父さんの言う通りよ。さ、後はお父さん達に任せて寝ましょ。」

コナン（くそ！誰も相手にしてくれねー）

コナンは密かに歯を食いしばった。

哀（…工藤君…）

コナン（…あ、待てよ………！）

蘭「ほらコナン君！」

コナン「だったらさ、明日どこかに遊びに行こうよ！浩樹君連れて一同「え！？」」

いきなりのコナンにみんなは驚いた。

小五郎「いい加減にしろ！俺たちは遊びに来たんじゃないんだぜ！それにその間に依頼者がきたらどーすんだ！」

コナン「明子さん達に頼めばいいじゃない。」

小五郎「てめえ」

コナン「行きたい！行きたい！！僕遊びに行きたい！」

コナン「得意のぶりっこ作戦。」

コナン「ねえ、いいでしょお姉さん」

明子「いいわよ。別に」明子は少し微笑みながら言った。

小五郎「あ、でも…」

明子「いいんですよ。明日は特に計画はありませんから。それに毛利さんもせっかく北海道にきたんですから疲れを癒やして下さい。氷恵美が来たときは連絡しますんで」

小五郎「す、すいません。コナン！ちゃんとお礼言えよ！」

コナン「はぁい。ありがとう、お姉さん達」

コナンはにつこり笑って例を言うと表情を変えた。

コナン（よし！）

哀「フフっ…」

コナン「なんだよ…」

哀「別に…」

コナン「……」

この後コナン達は部屋に戻って就寝の準備をした。



s u d d e n l y (後書き)

今回???だらけでしたね。読みにくかったと思いますが許して下さい。

次回の更新も遅くなるかも…

t r a p (前書き)

t r a p (策略)

更新遅くなってすみません m ( ) m

題名が思いつかなくて凄くシンプルになってしまいました (汗)

## t r a p

（205号室）

部屋に戻ったコナン達。浩樹君から詳しいことを聞こうとしたが、何一つ覚えていなかった。どうやら雪崩にあったショックで記憶喪失になったらしい。

“就寝時”

光彦「コナン君？さっきのは何なんですか？いきなり遊びに行きたいて。」

みんなが寝静まったところだった。何故か起きている光彦がコナンに尋ねた。

コナン「ん？あ、ああ…あれは犯人をあぶり出すためだよ。氷恵美さんのふりをして浩樹君の命を狙ってるやつをな」

光彦「は、犯人って！ちょっと待って下さい。なんでそんなことがいえるんですか？」

光彦は驚いてコナンに聞いた。ため息をついたコナンはその質問に冷静に答えた。

コナン「折り目正しい時候の挨拶まで丁寧に書くやつが約束の時間を破るなんて思えないし、弟のことが心配なら約束の時間に来て、なるべく早く見つけてもらおうとするだろ？  
でも実際そうじゃない。」

それは手紙を送った人は浩樹君のお姉さんの氷恵美さんじゃなく、そのふりをしている誰かってことだよ。」

光彦「で、でも、それはコナン君の思い込みでしょ？」

コナン「ああ、まあ……」

怒り気味な光彦に、コナンは少し戸惑った。

光彦の怒りは何故かエスカレートしていく。

光彦「勝手に決めつけるのは良くないと思います。だいたいコナン君はいつも」

コナン「バー口。俺は探偵だぜ？何かにおうんだよ、このヤマ。」

光彦「ぼ、僕だって探偵ですよ。なめかいください。」

コナン「悪いな、光彦。俺とオメーでは分けが違っんだ。」

光彦「な！？」

コナンの言葉にピキツときた光彦は言い返そうとしたが、その前にコナンが口を開いた。

コナン「確かに光彦の言う通りかもしれない。でも可能性は無いとはいえねーだろ？探偵は最悪の事態を考えなきゃいけないだよ。」

コナンの言葉に俯く光彦。さっきまでの怒りはどうしたのか、落ちて着いて言った。



光彦「それは……そう……ですよ……ごめんなさい。それよりコナン君。どうして浩樹君連れて遊びに行こうなんて言っただんですか？外に連れていくのはあまりにも危険なんじゃ……」

コナン「まだ犯人が誰かなんて分かってないし、証拠もねえ。浩樹君を外に出して犯人をギリギリまでおどらせて、後で追い詰めるんだ。」

光彦「つまり……」

コナン「一か八かの勝負って分けさ。」

光彦「……」

少しの沈黙が流れた。

コナン（いや、俺の推測はかなり高い確率であたってるんだ。浩樹君が何故病院から逃げたのか、何故あんなに人を怖がっていたのか。それは多分、雪崩は故意的に起こされたもので浩樹君は犯人をみてしまったからだ。それから記憶喪失になったものの、無意識のうち  
に人をさけるようになったんだ。  
つまり浩樹君は口封じのために狙われている可能性が高いんだ！）

“ 2月6日日曜日朝 ”

小五郎「ごめんなさい、うちのコナンの我が儘に付き合ってもらっ

て…」

明子「いいんですよ。さあ、ゆっくり楽しんでください。」

小五郎「では」

浩樹君を含めたコナン達一同は明子たちに礼を言つと、青藤ホテルを出て行った。

行き先は知床半島。

コナンは浩樹君から一度たりとも目を離さなかった。

## t r a p (後書き)

『一か八かの勝負』

コナン君に言わせたかった(笑)

監督が佐藤監督の頃のアニオリで、『完全半分犯罪』って話があるんですが、その犯人が『一か八かの賭け』って言ってたんですよ。その犯人はキヤラの好きで、『一か八かの勝負』ってコナンが言ったらもつと格好いいんだろなって思ったんです。だから使ってみました。

次回は蘭と新一の過去について触れたいです。

更新遅くなると思いますが、よろしく願いしますm( ) m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7948s/>

---

WHITE狂想曲

~ like you... ~

2011年10月8日20時12分発行